

## 「世界の希望」(ローマ八章一八〜二五節)

### 1 世界という次元

教会の暦では今日は終末前、主日になります。今週と来週は、歴史の終わり、キリストの再臨、永遠の救いなどを聖書から聞き、信仰、とくに希望を新たに、待降節を迎える日々となります。

こうした歴史の終わりを思う日々が与えられていることの一つの意味は、私どもいわば個人的な終わり、つまり死ということですが、それに思いをはせる機会が与えられるところにあります。

若いとき、元気なときは、何も考えない。それでいいのだと思いますが、しかし体をこわしたり、歳を重ねていくことになる、終わりということに否応なしに考えなければならなくなります。人間は一般に、力、喜び、健康、進歩・前進など、人生をその積極的な面においてだけとらえて、その反対のこと、弱さ、悲しみ、病氣、後退、そして死、こうしたことをふくみこんで人生を考えると、死を恐れません。死を周辺的なこととしてではなく中心なこととして考える、死を生から除外しないで考えるというようなことはできにくいのです。知らない多くの人の死、彼の死、彼らの死のニュースに囲まれながらも私の死をリアルに考えることができにくい、それが人間です。そうした中で人生の終わりのことを考える、しかも聖書という信頼できる書物を手引きに考える、そうした機会が与えられている、それは幸いなことなのです。

いま申し上げたように、聖書によって歴史の終わりを考えるというとき、個人的な終わりを考えることが一つの意味です。しかしそれとは反対に、私ども一人ひとりの個人を越えた、越えたというより、私どももその一部である世界、その全体を考えることもしなければなりません。歴史の終わりには世界という次元がある、そのことも聖書は私どもに告げているように思います。私どもも大きな世界、歴史の一部です。信じる者も信じない者も、そして人間だけではない。人間をふくめた世界、あるいは宇宙という次元です。そうしたことをふくめた歴史の終わりを考えるように聖書は私どもを促しています。

今日の聖書箇所、いま申し上げている世界という、私どももその一部でありながら私どもの外的世界、それがここでは「被造物」、造られたものという言葉で表されています。神によって造られたものとして、この被造物という言葉で、この地球をふくめた天地宇宙のことを考えるべきでしょうけれども、さし当たっては人間以外の生き物と考えておいてよいと思いますが、聖書の歴史の終わりに関することでは、たんに人間世界の終わり、生物の終わりではなくて、今の世の終わり、天地万物の終わりだということをお忘れてはならないと思います。古い世界が滅び、世界が改まる、世界が贖われる、万物が新しくされるということ(使徒三・二一、黙示二・一五)、それを聖書は考えています。

こうした世界、あるいは生き物中心の言い方で環境といったらよいでしょうか、私

どものいわば家であるこの地球環境、そして被造物、それに関係する多くの問題、そうしたことがキリスト教の取り組むべき問題としてはつきりと視野に入ってきたのは、そう古いことではありません。二十世紀の後半です。一九八三年の世界教会協議会(WCC)の大会で「正義・平和、被造物の調和(保全)」という主題での大会開催が提案され、じっさい九〇年代に入ってソウルで大会が開催されます。地球環境の悪化、破壊が問題になりつつあるとき、教会は聖書に教えられて、造られたものがすべてが調和して生きること、シャロームといつてよいと思いますが、それを模索し始めたのです。正義が行われなければ平和はない、平和がなければ、被造物が保全されることも調和のうちに保たれることもない。私も人間だけが幸せになればいいということではありません。造られたものがすべてが、神のご支配のもとにそれぞれにそのところを得るということ、被造物全体が、世界全体の保全と調和、それが現代の課題であり、私も教会の課題です。

## 2 呻き(うめき)

さて今日の聖書箇所はこの世界、被造物の現在を問題にしたものとしてきわめて独特の箇所です。また被造物の調和が重要かつ緊急の課題である時代にあつて、大切な聖書の一つです。

被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることをわたしたちは知っています(一九〜二二節)。

被造物はみなうめいている、産みの苦しみを味わっている、今日に至るまでそうだとわれています。うめくというのは、自分の力で変えることのできない状況の中で、対処しようのない苦しみを味わう、苦しみのあまり声をもらすということです。うめいているのはしかし、被造物だけではないのです。私も人間もうめいていると言われます。

被造物だけでなく、「霊」の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます(二三節)。

うめきにおいて人間も人間以外の被造物も一つです。しかし人間のうめきは、とくに私どもにおいて被造物よりもっと深いのです。というのも私どもは「霊」の初穂をいただいている、救いというものを少しでも知っている、それゆえうめきは被造物よ

りもつと切実なのです。

いずれにせよめいているのです。人間も、生き物も、キリスト者も、キリスト者でない者も、自然もうめいています。聖書にはこのうめきの声が満ちているといつてよいかも知れません。

義人ヨブがうめいています。「日毎のパンのように嘆きがわたしに巡ってくる。湧き出る水のようにわたしの呻きはとどまらない」(三・二四)。詩編の詩人たちが悪人にしいたげられ貧しさの中でうめいています。イザヤもエレミヤも、滅ぼされる異邦の民のために、神の民の、自らの苦しみのゆえにうめいています。哀歌では、神みずからが、「瞳のように愛して」(二・四) いたご自身の民を打たれたがゆえにうめいています。祭司も女たちも廢墟と化したエルサレムでうめいています。「シオンに上る道は嘆く、祭りに集う人がもはやいないのを。シオンの城門はすべて荒廢し、祭司らはうめく」(一・四)と。

しかしこうした神の民のうめきがそのままにされたのでないことも聖書は証ししています。出エジプトの出来事が聖書に伝えられています。エジプトで奴隸として苦しんでいた民がモーセに率いられた主なる神に導かれて脱出し、四〇年の歳月をへて、約束の地と入っていったという故事です。救いの原体験としてイスラエルの民に伝えられてきたものです。

その出来事は、救いを求める民の「うめき」(出エジプト二・二三、二四、六・五)が神の耳に達して起こったのです。うめきが神に聞こえた。その救いのために神は民のもとに下ってこられたのです。神はモーセにこういつています。「わたしは、エジプトにいるわたしの民が虐待されている有様を確かに見届け、その苦悩のうめき声を聞いたので、彼らを救い出すために下ってきたのである。さあ、今あなたをエジプトに遣わそう」。神はうめきを聞いておられます。聞くだけでなく、霊においてともにうめく方(ローマ八・二六)、うめき声をきいて下ってこられる方、ここに来られ、共にいます方、それが聖書の神なのです。

### 3 希望の忍耐

最近知ったことですが、カトリック教会は東方正教会などと一緒になって「被造物を大切にする世界祈願日」というものを決めているようです。九月一日ですが、今年も教皇からメッセージが流されました。私たちの家であるこの地球の環境を保全し被造物を守るために祈り、さまざまの取り組みがなされています。最近ではプラスチックごみの問題もとりあげられています。世界はどうせ終わるからいいという問題ではないのです。創造主から与えられたこの世界を調和あるものとし保全することは私どもの責任のことです。

それにしてもこの世界には、そして被造物にはどのような将来が用意されているのでしょうか。

聖書は、終わりの日に私どもが贖われることによって被造物も贖われると言ってい

ます。それゆえ「被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます」。被造物の救いは私どもの贖いにかかっていると云っています。なぜそうかというところ、被造物が虚無に服しているのは、人間が罪をおかしたと関係がある、人間が罪をおかした結果として被造物もうめいていると見ているからです。

創世記にアダムとエバ、人類の始祖のことが書いてあります。彼らは食べることを禁じられていた木の実を食べ、神の戒めに背きます。神に背いたことよってアダムとエバのあいだに亀裂が生じ（創世記三・一二）、へびに代表された被造物と人間とのあいだに「敵意」（三・一五）が生まれ、そうしたアダムのゆえにこの「地」（三・一七、口語訳）が呪われるようになったのです。創世記はそのようにその関わりを説明しています。かくて人間と自然とのあいだに、世界とのあいだに断絶と亀裂が生じます。被造物は、そしてこの世界は、人間が罪を犯したことで「虚無に服する」ものとなったのです。

したがって被造物には、世界には、アダムとエバ、人類の始祖の罪、私どもの罪が贖われることによって、「神の子」が生まれ出ることによって救われるという将来が約束されます。「被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです」。被造物の救い、世界の救いは人の救いにかかっているのです。人の救い、そこに世界の希望があります。

こうした考えると、私どもの救い、イエス・キリストの十字架の死と復活による罪のあがないというこの救いの決定的ともいえるべき意味が明らかになります。この十字架の救いが神の国の入り口です。

わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです（24〜25節）。

世界の希望は私どもにかかっている、説教を準備していて、自分でも予想していないような壮大な結論になってしまつて、おかしなことですが、わたし自身びっくりです。しかしやっぱりそうなんです。世界の希望は私どもにかかっていると云わざるをえないと思います。

世界の救いはまだ希望です。しかし「希望によって救われている」とあります。希望していることが救われていることだと聖書は言っています。ここにはないもの・見えないものによって生きるのが希望です。ここにはない・見えないものに対する希望をなくさないことです。希望をなくさないとは、希望の忍耐に生きることです。被造物がうめいているこの時代、世界の政治・日本の政治においても決して樂觀を許さないこの時代、しかし希望だけは、神による全世界の贖いと救いを信じる希望だけは、決してなくさず力強く歩んでいきたいと思えます。

（二〇一八年一月一日）